

平成26年12月15日

立川市議会

議長 須崎 八朗 殿

立川市議会 環境建設委員会

委員長 大石 ふみお

行政視察報告

このことについて、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察月日

平成26年11月4日（火）から平成26年11月5日（水）

の1泊2日

2 視察地及び視察事項

| 視察都市名 | 視 察 事 項 |
|---------|-------------------|
| 栃木県宇都宮市 | 自転車を活用したまちづくりについて |
| 岩手県紫波町 | 循環型まちづくりについて |

3 視察の概要及び所感

別紙のとおり

環境建設委員会行政視察報告書

- ・視察項目 自転車を活用したまちづくりについて
自転車で“走れば愉快だ”宇都宮
「宇都宮市自転車のまち推進計画」
- ・視察地 栃木県宇都宮市 人口約52万人
- ・視察月日 平成26年11月4日(火) 13時30分から15時00分
- ・視察内容

1、市の概況

宇都宮市は、平成8年に市制100周年を迎えたことを契機に、関東地方で唯一「中核市」の指定を受けました。

更に、平成19年3月31日には、近隣の上河内町ならびに河内町と合併し、北関東初の50万都市となりました。

また、平成23年には北関東横断自動車道が全線開通し、恵まれた立地条件や交通条件、各種都市機能が集積された事で、栃木県の政治・経済・文化の中心地になったと同時に、これからも首都圏の北の拠点都市として発展を続ける都市であります。

2、市政運営

宇都宮市は、現在平成20年3月に策定した「第5次総合計画」を指針としながら、輝く希望と笑顔にあふれた「みんなが幸せに暮らせるまち」、独自の存在感と風格を備えた「みんなに選ばれるまち」、まちづくりの仕組みが整い、みんなでまちをつくる活力あふれた「持続的に発展できるまち」の実現に向けて取り組み、平成25年4月に改定した後期基本計画に基づき、10の戦略プロジェクトを中心として重点的に進めております。

3、事業の概要（導入の経過及び目的・内容）について

平成15年から、自転車走行空間や駐輪場の整備などの自転車施策に取り組んできたが、近年自転車は、環境意識や健康志向の高まりなどにより注目を集めるとともに、レジャーや余暇活動等に活用されるなど、自転車を取り巻く環境やニーズが大きく変化し、更なる施策展開が必要となってきたことから、平成22年度に本計画を策定した。本計画では、誰もが安全で快適に楽しく自転車を使える「自転車のまち宇都宮」の実現に向けて、4つの施策の柱に基づき様々な取り組みを推進している。

<主な取り組み>

- 1 【安全】安全に自転車が見える～安全性の向上～
 - ・自転車走行空間の整備
 - ・交通安全教室の実施
- 2 【快適】快適に自転車が見える～快適性の向上～
 - ・休憩スポット（自転車の駅）の創出
 - ・鉄道駅周辺への駐輪場整備
- 3 【楽しく】楽しく自転車が見える～観光やスポーツの推進～
 - ・観光レンタサイクルの導入
 - ・宮サイクルステーションの運営
 - ・自転車マップの作成
- 4 【健康とエコ】健康とエコに自転車が見える～健康の増進と環境保全～
 - ・自転車モニター事業の実施

4、事業の成果について

- ・自転車走行空間の整備や交通安全教室の実施により、交通事故の減少が見られるなど、安全性の向上が図られている。

<自転車事故件数> H21⇒727件 H25⇒509件

- ・駐輪場の整備などにより放置自転車の減少につながっている。

<放置自転車台数> H20⇒749台 H25⇒356台

- ・市営駐輪場におけるレンタサイクルの拡充や宮サイクルステーションの運営により、自転車による回遊性の向上や利用機会の拡大につながっている。

<市営駐輪場レンタサイクル台数>

H21⇒31, 357台 H25⇒45, 662台

<宮サイクルステーション、レンタサイクル台数>

H23⇒883台 H25⇒852台

*宮サイクルステーションはスポーツバイクのレンタサイクル

- ◎宮サイクルステーションにおける利用者アンケート結果（H25実施）
約9割の利用者が「満足」または「ほぼ満足」と回答している。

5、今後の課題及び展望について

近年、全国的に「自転車」に対する関心が高まり、様々な自治体において自転車施策がすすめられる中、「自転車のまち宇都宮」として先駆的な事業展開が必要となっていることから、現行計画における取り組みの効果検証を踏まえながら、更なる充実を図るとともに、

本市特有の地域資産であるジャパンカップや宇都宮ブリッツェン（プロロードレースチーム）などを活用し、観光・スポーツ振興との連携による来街者の誘客や市民意識の醸成につながるような新たな施策の展開が必要であるとのこと。

6、今後における立川市の取り組みとしては、

立川市も、宇都宮市と同様に平坦な土地からであること、また、立川競輪と同様に宇都宮競輪があること、更には今後においてもますます発展を遂げていく街であることなど、人口の違いがあるにしてもよく似ている都市であると感じます。

そんな中で、立川市では試行ではありますが、緑川通りにおいて自転車走行専用レーンを設けております、また、立川駅周辺においての駐輪場の整備（有料化・格差付け）、レンタサイクルの実施（高松駅）サイクルシェアリングの試行などに取り組んできております。

更には、今後においては、旧多摩川小学校有効活用事業においては、自転車をいかしたまちづくりの拠点として「サイクル・ステーション」の整備を行います。

最後に、環境にも健康にも良い自転車の活用は、今後のまちづくりには欠かすことが出来ないことは論を待ちません。

これからも議会として、市民の皆さんが安心して、また「快適に自転車が利用できるまち立川」の充実を目指して努力してまいります。

以上で環境建設委員会行政視察の報告とさせていただきます。

以上

紫波町循環型まちづくり視察報告

【事業の概要】

紫波町は自然な資源が豊富な地域性を生かした「循環型まちづくり」を指標し、環境と福祉政策を重点的に推進してきた。日々の暮らしの中に環境を重視した取り組みを実践し、100年後の子どもたちに引き継ぐべく環境の保全を提唱し、住民、事業者、市民団体及び行政が一体となった取り組みを進めている。

➤ 平成12年(2000年)6月「新世紀未来宣言」発表……町民の環境に対する機運の高まり

➤ 平成13年(2001年)6月「紫波町循環型まちづくり条例」制定

その後「紫波町環境・循環基本計画」を策定し4つの方針(資源循環のまちづくり, 環境創造のまちづくり, 環境学習のまちづくり, 交流と協働のまちづくり)を掲げた。(別途資料)

① 紫波中央駅前エネルギーステーション事業

紫波中央駅前町の町有地に新庁舎や民間事業棟、57棟の住宅を建設する計画を公民連携で進める事業。これらの建物で使用される冷暖房熱を供給するエネルギーステーションを建設し、熱供給を行い紫波町の循環型まちづくりに貢献する。その為のエネルギーステーションの熱源には主に木質のバイオマスエネルギーを利用し、可能な限りの町内産の木材を利用する。

<事業予算>

初期投資 5億

<特長>

熱供給においては町内で生産された木質チップ(紫波町の自然木材の10%を使用)を主燃料とする木質バイオマスを使用。高価な製紙用チップではなく、安価な燃料用チップを紫波町農林公社より供給する。

<供給先>

新庁舎, A~D民間事業棟, 住宅57軒

<事業主体>

紫波グリーンエネルギー株式会社

<助成>

環境省「地域の再生可能エネルギー等を活用した自立分散型地域づくりモデル事業」

<熱供給システム>

添付の資料の通り

※遠隔監視制御システム

機器は施設内の制御盤による自動運転。この制御盤のデータは遠隔でも見ることができ、手持ちのPC機器での遠隔操作も可能。

<施設の維持管理・運営体制>

定常運転時は無人運転。メンテナンス及びトラブル対応は紫波グリーンエネルギー(株)が窓口。

② 環境・循環PRセンター

紫波町が取り組む「循環型まちづくり」の理念を共有するNPO法人紫波みらい研究所の提案により、多くのボランティアや町内業者の協力の下に平成17年に完成。センターでは町産・県産木材及び木工品の展示やPRをする「農楽交流館」、紫波町の循環型まちづくりを紹介・PRし、環境学習等独自の活動を行う「NPO法人紫波みらい研究所」がまちの情報発信や環境学習の場として使用している。またセンター内の暖房はペレットストーブを使用しており、地球温暖化対策と木質バイオマスの利用推進・PRも行っている。

③ 紫波中央駅待合施設

紫波町の森林資源循環では町産木材を積極的に活用する取り組みとして、公共施設の木造建築を推進している。その代表的な建築物として紫波中央駅待合施設が建築された。紫波町の玄関口として森林資源循環と循環型まちづくりのPR効果を得ており、利用者に木のぬくもりや安らぎを感じていただき、森林保全を育む心を培って欲しいという思いも込められている。待合室の天井には樹齢120年の南部アカマツの梁を使用し、待合室中央にはスギ材を利用した大型曲線ベンチが据えられている。

④ オガールプラザ

紫波町が紫波中央駅前帯の開発に取り組んでいる「オガールプロジェクト(紫波駅前都市整備事業)」の下で建設された官民複合施設。施設はほぼ町産の木材を使用。全国的にも珍しい木造大型建築といわれている。館内には紫波町情報交流館(図書館・交流館)、紫波町子育て応援センター「しわっせ」等の町の施設のほか、県内一の広さを誇る産直やクリニック、居酒屋、カフェ、ショップ等がテナントとして入っており、皆が楽しめるコミュニケーション広場として利用されている。

<所感>

森林資源等の自然環境に恵まれた紫波の環境を100年後の子どもたちに繋げていくという百年を視野に入れた「新世紀未来宣言」を紫波町はいち早く発表した。特に自然環境を最大限有効に活用する資源循環のまちづくりは、住民・事業者・NPO・行政が一体となった取り組みで、自らの持つ力で地方創生を成し遂げようとする紫波町の活力と郷土愛を感じた。特に当該項目である紫波中央駅前エネルギーステーション事業は地元産の木材を建築とエネルギー資源に最も有効に充てたプロジェクトである。官民複合施設として全国でも珍しい資源循環と経済循環の両立のモデルであり、地方における循環型まちづくりの先進事例として今後立川市の環境政策に十分生かしていきたい。